

平成 30 年 6 月 30 日発行

三重大学 日本語学文学第 29 号 抜刷

コリヤードの t 入声表記とツ表記

— スペイン系写本との比較から —

川 口 敦 子

コリヤードの t 入声表記とツ表記

— スペイン系写本との比較から —

川 口 敦 子

1. はじめに

1549年のザビエル来日以来、日本布教はポルトガルの支援を受けたイエズス会が担っていたが、その後、スペイン系の修道会が来日して宣教活動を行った。フランシスコ会の日本布教は1593年、ドミニコ会とアウグスチノ会の日本布教は1602年に始まったとされる。イエズス会は1590年以降、日本で出版活動を開始しており、ドミニコ会では先行するイエズス会の出版物のローマ字表記を参照して日本関係の出版活動を行ったことが知られている。

イエズス会関係の資料のローマ字表記について、写本には版本に見られない特異な表記があることが知られている。一方、スペイン系のドミニコ会版『ロザリオ記録』やコリヤード三部作（『懺悔録』、『日本文典』、『羅西日辞書』）はイエズス会版に倣ったポルトガル語式のローマ字表記を取り入れているが、アビラ・ヒロン『日本王国記』のような写本類には版本と異なる表記が見られる。川口（2016）・川口（2017）では、『日本王国記』における版本と異なる特徴的な表記は、著者アビラ・ヒロン個人のものではなく、他のフランシスコ会系写本にも見られるものであり、イエズス会とは異なる背景を持つスペイン系写本（以下「非イエズス会スペイン系写本」とする）共通の表記であることを指摘した。

本稿では、コリヤード自筆『西日辞書』に見られる特異な t 入声表記と、コリヤードの著作に共通して使われている mizu（蜜）の表記を取り上げ、これらの特異な表記について、非イエズス会スペイン系写本の表記との関連について述べる。

2. t 入声表記

コリヤードは基本的にイエズス会版本の表記規範を踏襲しており、t 入声に相当する音節は原則として -t で表記する。コリヤード自筆『西日辞書』も概ね同様の表記を取るが、一部に版本とは異なる表記が存在する。t 入声に相当する表記を tc とする、以下の 2 例である。

Xòcubùtç (「食物」『西日辞書』15r16)

cùguàtç (「九月」同76v23)

なお、影印本の画像ではわかりにくいだが、原本を確認したところ(2018年3月20日、ヴァチカン図書館にて閲覧)、15丁表の「Xòcubùtç」は、「Xòcubùt.」と、tの後にピリオドを書いてから、tとピリオドの間にçを書き足して「Xòcubùtç.」としたように見える。一方の76丁裏の「cùguàtç」には書き足し等の形跡は見られなかった。

イエズス会版の表記に倣うならば、それぞれ「xocubut」「cuguat」のように表記されるはずである。実際、「食物」については、『西日辞書』においても「xòcubùt」の表記が2例あるし(15r22、28v29)、版本の『羅西日辞書』(1632刊)でも「xòcubùt」3例(p.20左 Cibus、p.184左 Cibalis、p.296左 Pabulum)、「xòcubut」1例(p.200左 Daps)、「xõcubùt」1例(p.221左 Esca)、「xõcubut」2例(p.230右 Ferculum、p.349右 Victus)があり、いずれもt入声に相当する箇所はイエズス会版と同じ-tの表記をとる。

また、後部要素が「月」の漢語について、『西日辞書』ではt入声保存形-tまたは開音節化形chiの表記をとるのが一般的である。

〔t入声保存形〕

jítguèt (「日月」、25r37)、nànguàt (「何月」76v14)、Xõguàt (「正月」73v07、76v15)、niguàt (「二月」76v16)、sànguàt (「三月」、76v17)、xichiguàt (「七月」76v21)、raiguàt (「来月」61v28)

〔開音節化形〕

xiguàchi (「四月」76v18)、gòguàchi (「五月」76v19)、rocuguàchi (「六月」76v20)、fàchiguàchi (「八月」76v22)、jũguàchi (「十月」76v24)

以上の例から、t入声に相当する音節をtçとする表記2例は、『西日辞書』の中においても特異なものと言える。

それでは、この「t入声=tç」という表記をどのように考えるべきであろうか。

①単純な誤字の可能性

単純な誤字の可能性を考える場合、それはつまり開音節のツtçuのuが誤って脱落したということになるだろう。そのためには、「食物」や「九月」等の語のt入声音が開音節化したものでtçuと表記する例がある程度一般的であったという前提が必要であろう。

例として、後部要素が「月」の漢語について、t入声の開音節化形がどのように表記されているかを確認する。

『日葡辞書』(1603-04刊)では、以下に示すように、t入声保存形guatの他に開音節化したguachiが見られるが、guatçuの形は見当たらない。

「五月」… Goguat. l. goguachi. *A quinta lãa do anno de Iapão*. (補遺354r 左)

「十月」… Caminazzuqi. P. jũguachi. *Outubro*. (見出し語「神無月」、34v 右)

「七月」… Xichiguat. *Septima Lũa, ou mes.* (300r 左) / Isocu. i. Xichiguachi.
Septima lũa. (見出し語「夷則」、134v 右)

「四月」… Chũrio. i. xiguachi. *Quarta lũa, ou mez de Iapão.* (見出し語「仲呂」、51v 右)
/ Xiguat. *Quarta Lũa, ou mes de Iapão.* (301r 左)

写本類については、バレット写本 (1591写) では開音節化形 guachi が11例見られる。
バレット写本ではツは主に ccu・ççu (少数ながら tcu も) と表記するが、「～月」を guaccu・
guaççu (または guatcu) とする形は見当たらなかった。

fachiguachi (「八月」バレット写本226r13, 292v14)

goguachi (「五月」同325r17, 363v17)

Juguachi (「十月」同188r14)

Juichi guachi (「十一月」同283r17)

Juniguachi (「十二月」同289a.r08)

xichiguachi (「七月」同188r11-12, 275b.v01)

xinguachi (「四月」同321r17)

xoguachi (「正月」同3v03)

ただし、他のイエズス会系の写本類では、t 入声保存形が一般的である。イエズス
会ローマ文書館 Jap. Sin. 文書に収められている全文がローマ字書き日本語の文書 5 点
(1564年から1621年頃までのもの) では「～月」は guat の例のみであり、開音節化した例
は見当たらなかった。

conguatno (「今月の」 ARSI Jap. Sin 34, 178r26)

Cuguat (「九月」 ARSI Jap. Sin. 33, 76r12)

Fachiguat 29. (「八月29」 ARSI Jap. Sin. 34, 178r08)

guoguat (「五月」 ARSI Jap. Sin. 5, 177a.v02)

Jũguat (「十月」 ARSI Jap. Sin. 17, 319r03)

quguatni (「九月に」 ARSI Jap. Sin. 5, 177a.r21)

Rocuguat (「六月」 ARSI Jap. Sin. 17, 317r20, 318r02, 318v19, 318v29, ARSI Jap. Sin. 34, 178v09)

Xichiguat 28. (「七月28」 ARSI Jap. Sin.34, 188r14)

xigoguatno (「四五月の」 ARSI Jap. Sin. 5, 177a.r18)

以上の例から、イエズス会資料では版本写本ともに漢語の「～月」は、t 入声保存
形の guat または開音節化形 guachi と表記するものであり、guatçu (グワツ) の形は
見当たらないことが確認できる。

コリヤード『羅西日辞書』(1632刊) では、漢語「～月」の t 入声について、t 入声
保存形 -t の表記はあるが、開音節化形は見当たらないようである。

Nanban no cũguàt (『羅西日辞書』328左 September)

Nanban no jũguat. (同 p. 200右 December)

それでは、非イエズス会スペイン系写本の場合はどうだろうか。フランシスコ会士ディエゴ・デ・チンチョンによる殉教報告書（フランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵 AFIO 23-1。原文スペイン語。以下「チンチョン報告書」とする）には、t 入声保存形と思われる -tz が 1 例（後述）、t 入声の開音節化形として chi が 2 例、tzu が 1 例、tcu が 1 例見られる。以下に挙げるのは開音節化形の例である。

xichinguachi ychinichi（「七月一日」AFIO 23-1, 15v15-16）

xichinguachi futzuca（「七月二日」同18r08）

isatzuuo（「一札を」同18r05）

Esto fue a los treze del xichiguatcu q~ fue dia del gloriosso ...（「七月」同24r11）

スペイン人ペルナルディーノ・デ・アピラ・ヒロン『日本王国記』第2輯第13～14章（第3輯第23～31章）は、チンチョン報告書と類似した内容を持つ箇所であるが、該当箇所には漢語「～月」の開音節化した例は見当たらなかった。

チンチョン報告書に見られる tcu と tzu の各 1 例をもって t 入声の開音節化形で「ツ」（tcu）表記が一般的であったと言うのは難しい。特に「～月」の開音節化形はグワツ（guatcu）ではなくグワチ（guachi）が一般的であったと考えるべきだろう。

したがって、「xocubutcu」「cuguatcu」という表記が普通に存在したとは言えず、『西日辞書』の「Xòcubùtç」「cùguàtç」の末尾の tç が tçu の u を脱落した単純な書き誤りであるとは考えにくい。

②非イエズス会スペイン系写本の表記との関係

非イエズス会スペイン系写本では、t 入声に相当する箇所に -tz 表記を用いるのが一般的である。

チンチョン報告書には「xichinguatz」（七月）が 1 例見られる。

a los veynte y dos del dicho xichinguatz embiaron ...（「七月」AFIO 23-1, 25v25）

アピラ・ヒロン『日本王国記』第2輯第13～14章相当箇所の該当語彙は、「七月」4 例、「一札」1 例である。第2輯系統のスペイン国立図書館（BNE）本と、原本に近い写本とされる、第3輯系統のフランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵 AFIO 26-3 には、それぞれ -tz が 4 例、開音節化した tzu が 1 例見られる（表1）。

表1 『日本王国記』の t 入声表記

BNE 本		AFIO 26-3	
173r14	xichunguatz（七月）	94v26	xichinguatz（七月）
175v10	Xichinguatz	96v02	Xichinguatz
181v18	xichinguatz	101r11	xichinguatz
184v06	xichunguatz	103r04	xichinguatz
175v08	Ysatzuuo（一札を）	96r28	isatzuuo（一札を）

以上の例から、非イエズス会スペイン系写本では t 入声は -t よりむしろ -tz と表記するのが一般的であったことがわかる。

ところで、これら非イエズス会スペイン系写本では、日本語語彙における「ツ」に相当する表記としては一般的に tzu が使われている。

チンチョン報告書においては、ツに相当する表記は以下の 3 例でいずれも tzu である。

Cumingaxerauo tzu[c]amatzuri (「組頭を仕り」 AFIO 23-1, 15v14)

xichinguachi futzuca (「七月二日」 同18r08)

なお、イエズス会資料と同じ tcu 表記は、t 入声の開音節化と思われる前述の 1 例 (AFIO23-1, 24r11) のみである。

『日本王国記』第 2 輯第 13～14 章相当箇所では、ツ表記として tzu が 2 例、tz が 1 例見られる (表 2)。BNE 本、AFIO26-3 とともに同じ表記である。

表 2 『日本王国記』のツ表記

BNE 本		AFIO26-3	
173r12	<u>tzucamat<u>zuri</u></u> (仕り)	94v24-25	<u>tzucamat<u>zuri</u></u> (仕り)
175v10	fut <u>z</u> ca (二日)	96v02	fut <u>z</u> ca (二日)

このように日本語の「ツ」は、非イエズス会スペイン系写本では tzu と表記されるのが一般的である。これは、イエズス会の版本とそれに倣ったドミニコ会版の tçu やイエズス会写本の ccu (ççu)・tcu とは異なる表記規範であると言える。

イエズス会資料と、非イエズス会スペイン系資料の表記の関係をまとめると、次の表 3 のようになる (カッコ内は少数の例)。

表 3 ツ表記と t 入声表記

	イエズス会		非イエズス会スペイン系	
	版本	写本	版本	写本
				コリヤード『西日辞書』 『日本王国記』、チンチョン報告書
ツ	tçu	tcu ccu	tçu	tçu ----- tzu (tz)
t 入声	-t	-t	-t (-tç)	-t ----- -tz (-tzu, -tcu)

中世ポルトガル語では ç と z、-z- は表記において混同されることはなく (池上1984: 113-114)、ポルトガル語式の表記では tçu と tzu は入れ替えが不可能であった。一方、16・17世紀のカスティーリャ語では /z/ は無声化しており、それまで有声と無声で対立していた z と ç は綴り字上の混同が生じていて (山田他1996: 112、寺崎2011: 203)、したがって当時のスペイン語 (カスティーリャ語) では tçu と tzu の表記の入れ替えが可能であった。つまり、スペイン人にとって写本の tzu は、イエズス会版本の tçu に置

き換えることが可能な表記であった。

これと同様に、スペイン系写本の t 入声音表記として使われている -tz も、文字の置き換えだけで考えれば、-tç に置き換えることが可能だったはずである。

スペイン人であるコリヤードにとっては、他のスペイン系写本で一般的に使われている「ツ = tzu」や「t 入声 = -tz」の表記のほうが自然であっただろう。ところが、ドミニコ会版やコリヤードの版本では、ポルトガル語式のイエズス会の表記規範を踏襲したので、tzu は tçu に、-tz は -t に置き換えなければならなかった。tzu と tçu の置換は z と ç の文字を入れ替えるだけなので置き換えやすいが、t 入声の -tz は -tç ではなく -t に置き換えなければならず、ç と t の単純な文字置換では対処できない。このひと手間があることによって、何らかの手違いが起きたのではないだろうか。

コリヤードが t 入声について、非イエズス会スペイン系写本で使われる -tz の表記をイエズス会資料と同様の表記に改める際、本来ならば -tz の表記を文字単位ではなく音節単位で -t に置き換えなければならないところを、うっかり z と ç の文字の入れ替えで対処して -tç の二文字に置き換えてしまったのではないか。それがそのまま残ったのが、コリヤード自筆『西日辞書』の2例なのではないだろうか。

3. コリヤードのツ表記

コリヤード『日本文典』には、zu と zzu の表記について言及した箇所がある。ここでは「蜜」(ミツ)を意味する日本語の表記として mizu が使われている。

Litera, z, pronunciatur ea vi, qua in lingua Hispaniæ, Zumbar, v.g. mizu. Si verò fuerint duo, zz, violentiùs feriuntur. v.g. mizzu.

Quando fuerint duo, tt, xx, zz, qq, cq, ij, pp; vtrumque oportet ferire vt sit perfecta pronunciatio, & vis significationis percipiatur: nam v.g. mizu, significat mel; & mizzu, significat aquam: vnde si eadem, vel violentia, aut lenitate vtrumque pronunties vel aquam tantum, vel mel solum tibi proferent.

(D. Collado. *Ars grammaticae Iaponicæ lingvæ*, p.4)

文字 z はイスパニア語の Zumbar のように強く発音される。例、mizu。

しかし、もし二つの zz があるならば、より激しく音を出す。例、mizzu。

もし tt, xx, zz, qq, cq, ij, pp のように二つあるならば、完全な発音と意味の理解のためには適切に音を出すべきである——すなわち、例として「蜜」を意味する mizu と「水」を意味する mizzu——もし同じならば、激しく発音するか穏やかに発音するかによって、「水」か「蜜」のいずれかが意味されるからである。

(コリヤード『日本文典』4頁、私訳)

コリヤード『日本文典』では、zu はイエズス会資料と同様に「ズ」に相当する表記

であるし、また「ツ」は tçu で表記するのが一般的である。したがって、『日本文典』4 頁で「蜜」の意味で mizu と表記して zu という綴りの説明を述べるのは、不可解である。

コリヤードの著作では、「蜜」は mitçu ではなく mizu と表記されており、この語の「ツ」に相当する音節だけ tçu ではなく zu と表記されている。これは『日本文典』だけでなく、『西日辞書』や『羅西日辞書』でも同様である。

miel. mizu. (「蜜」、『西日辞書』71r01)

panal de abejas. mizu bachi. (「蜜鉢」、同84v10)

Mel, is: miel, mizu. (「蜜」、『羅西日辞書』p. 80左)

Fauus mellis. panal de abejas. mizu bachi. (「蜜鉢」、同 p. 48右)

以上の例を見る限り、コリヤードの著作においては「蜜」は mizu の表記で一貫しており、単純な誤植とは考えにくい。

なお、コリヤードは、同音異義語の「三つ」はいずれもイエズス会資料と同様に mitçu (mitcu) と表記している。

tres mîtçu. (『西日辞書』9r08)

tres. mitcu (同75r20)

Tres, tria, tres. mitçu. (『羅西日辞書』p. 343右)

コリヤードは「蜜」の「ツ」に相当する表記だけ、他の「ツ」に相当する表記とは異なる表記を用いていたことになる。

「蜜」は元々は t 入声で終わる語であるが、『日葡辞書』には開音節化した形で Mitçu と表記されており、この時代には既に開音節化していたと考えられる。

Mitçu. Mel. (「蜜」、『日葡辞書』162r 左)

『日葡辞書』には、これと同音異義語の「三つ」とその複合語も掲載されているが、同じく Mitçu の表記である。

Mitçu. Tres. (「三つ」、『日葡辞書』補遺363r 左)

Mitçubajeri. Erua aşi chamada. (「三葉芹」、『日葡辞書』162r 左)

Mitçubiqiriö. Tres listras, ou riscas que serueus de marca, ou diuisa.

(「三引両」、同上)

イエズス会系の写本類では「ツ」を cuu (ççu)・tcu (tçu) と表記するが、パレト写本では「蜜」も「三つ」も miccu と表記する。

aramiccu mel siluestre (「あら蜜－野生の蜜」、パレト写本347r 書き入れ)

miccuno sumidocorovo (「三つの住み処を」、同18v10)

つまり、イエズス会資料では「蜜」も「三つ」も同じ表記で、版本では mitçu、写本では miccu と表記するのである。したがって、コリヤードの著作における「蜜 = mizu」という表記は、イエズス会資料の表記規範とは合わないということになる。

コリヤードの「蜜 = mizu」という表記は、一体何を意味しているのであろうか。

前述の『日本文典』4頁では、コリヤードは zu と zzu の発音の違いを、「蜜」(mizu) と「水(みづ)」(mizzu) の二語を例に挙げて説明している。ツとヅの違いならば無声音と有声音の違いの話であるし、ズとヅならば摩擦音と破擦音(推定)の違いの話になろう。ここでは zu と zzu の違いを発音の強弱の違いであると述べていることから、無声音と有声音(ツとヅ)の違いではなく、摩擦音と破擦音の違い、つまりズとヅの違いについて述べていると解釈するのが妥当である。ということは、「蜜」はミツではなくミズと摩擦音で発音する、と(少なくとも)コリヤードは考えていたことになるだろうか。

ただし、コリヤードの認識と実際の音声がどうであったかは、切り離して考えなければならない。『日葡辞書』で「蜜」が mitçu と表記されていることを考えると、1603年出版の『日葡辞書』の頃に無声破擦音だったものが、約三十年後のコリヤードの時代の日本で有声摩擦音に変化していた、あるいは混同されていた、ということがあり得たのかどうかということが問題になるが、コリヤードは「蜜」以外の語では tçu の表記を用いているのだから、「蜜」に限ってツの発音が摩擦音化していたというのも考えにくい。

そこで考えられるのが、写本類でツを zu と表記する例との関係である。土井(1982)によれば、アビラ・ヒロン『日本王国記』のエスコリアル本にはツを zu と表記した例が見られる。

アビラ・ヒロンは清濁を通じて tzu を基本とし、(中略)清音のツに tzu 以外の綴字を用いたのは稀ではあるが、Cuchinozu (口の津、三七七ページ、マドリード本では Cuchinotzu)、Mazçuxima (松島、四六二ページ)、Ximozqui (霜月、九五ページ)、Ximoçunque (下野、一二七ページ、マドリード本では Ximozqui) などがあり、この音節のローマ字綴りの不安定性を物語っている。

(土井1982: 284。引用文中のページは『大航海時代叢書』XIの該当ページ)

土井氏の指摘にあるエスコリアル本の該当箇所(161v25)には確かに Cuchinozu とあり、ツ = zu の例が確認できる。

ただし、原本に近いとされる AFIO 26-3では、該当箇所は Cuchinotzu とあって zu ではなく tzu で表記されており(AFIO 26-3, 111v08)、エスコリアル本の表記が書き誤りである可能性も否定は出来ない。ただし、それが仮に書き誤りであったとしても、それはツを tzu と表記する非イエズス会スペイン系写本の表記規範に由来するものであり、イエズス会資料の tçu や ccu という表記からは生じ得なかった誤りだと言うことが出来るだろう。

以上を踏まえて、キリシタン資料におけるツ・ズ・ヅの表記を、イエズス会資料の版本と写本、非イエズス会スペイン系資料のうち、ドミニコ会版、コリヤードの著作(版本と写本)、それ以外の写本に分けて概観すると、次の表4のようになる。

表4 ツ・ズ・ヅ表記

	イエズス会		非イエズス会スペイン系			
	版本	写本	版本		写本	
			ドミニコ会版	コリヤード 三部作	コリヤード 『西日辞書』	『日本王国記』等
ツ	tçu	tcu, tçu ccu, ççu	tçu	tçu		tzu, tz, zu, zçu, z, çu
				zu (「蜜」のみ)		
ズ	zu	zu	zu	zu		zu 等
ヅ	zzu (dzu)	zzu	zzu	zzu		ntzu, tzu 等

日本語のツに相当する表記がポルトガル語になかったために tçu の表記が考案されたのと同様、スペイン語にも日本語のツに相当する表記がなく、そのため、土井氏が指摘したように、表記が不安定であったと考えられる。

コリヤードの「蜜」の mizu における zu の表記は、t 入声表記に写本の表記の影響が認められたのと同様に、表記が不安定だった写本における「ツ = zu 表記」または「ツ = tzu 表記の書き誤り」の影響によるものと考えすることはできないだろうか。

4. おわりに

本稿では、コリヤードの著作に見られる特異な表記について、それが単なる書き誤りや誤植ではなく、イエズス会とは異なる背景を持つ、ドミニコ会やフランシスコ会などのスペイン系写本において日本語表記として使われていた綴り字の影響によるものである可能性を示すことが出来た。

従来の研究ではイエズス会資料の表記規範との関係が注視されていたが、版本の表記と写本の表記、そしてイエズス会資料だけでなく非イエズス会資料も参照することによって、それぞれの影響関係が見えてくるのである。

非イエズス会スペイン系写本は、現存する資料の少なさから日本語研究の対象とはなりにくい資料であったが、キリシタン資料のローマ字表記について、これまで気付かれていなかった側面を見いだすことができる資料であると言える。

【付記】本稿は、第8回キリシタン語学研究会（2018年3月3日、大阪大学豊中キャンパス）および10th International Conference of Missionary Linguistics（2018年3月22日、ローマ大学ラ・サピエンツァ）における口頭発表に加筆修正を行ったものである。席上、貴重な御意見をくださった皆さまに感謝申し上げます。

なお、本稿は平成27－30年度科学研究費助成事業・基盤研究（C）（課題番号15K02564）の成果の一部である。

【使用テキスト】※本文引用中の下線はすべて引用者によるものである。

〔イエズス会資料〕

- ・『キリシタン版 日葡辞書 カラー影印版』、勉誠出版、2013
- ・バレット写本…ヴァチカン図書館所蔵 Reg. Lat. 459 (デジタル化マイクロフィルム画像)
- ・ARSI Jap. Sin. 5, 177-179 (1564年) …川口敦子 (2004) 「イエズス会ローマ文書館所蔵1564年5月24日付ダミアン修道士による日本語書簡について」、『国語と教育』29, pp.46-57
- ・ARSI Jap. Sin. 17, 317r-319r (1617年) …川口敦子 (2006) 「イエズス会ローマ文書館所蔵1617年ポーロ報告書内殉教証言書の日本語表記」、『長崎大学教育学部紀要：人文科学』72, pp.1-11
- ・ARSI Jap. Sin. 33, 76r (1604年) …川口敦子 (2007) 「イエズス会ローマ文書館所蔵慶長九年九月二十七日付ローマ字書簡の日本語表記」、『長崎大学教育学部紀要：人文科学』73, pp.1-7
- ・ARSI Jap. Sin. 34, 178r-178v (1619年) …川口敦子 (2008) 「イエズス会ローマ文書館所蔵レオナルド木村によるローマ字書簡の日本語表記」、『国語と教育』33, pp.70-78
- ・ARSI Jap. Sin.34, 188r (1621年?) …川口敦子 (2007) 「イエズス会ローマ文書館所蔵ジェロニモ・ロドリゲス宛書簡の日本語表記」、『国語と教育』32, pp.89-97

〔ドミニコ会版、コリヤード関係〕

- ・三橋健編『ロザリオ記録』本文篇・解題篇、桜楓社、1978
 - ・大塚光信・小島幸枝編『コリヤード自筆 西日辞書』、臨川書店、1985
 - ・大塚光信『コリヤード羅西日辞典』、臨川書店、1966
 - ・大塚光信解題『羅西日辞書』、勉誠社、1979
 - ・Collado, Diego. *Ars grammaticae Iaponicae linguae*. Roma, 1632. (コリヤード『日本文典』) アンジェリカ図書館所蔵12-3-IX(1) (デジタル化マイクロフィルム画像)
- 〔非イエズス会スペイン系写本〕
- ・佐久間正他訳注『アビラ・ヒロン日本王国記 ルイス・フロイス日欧文化比較』大航海時代叢書 XI、岩波書店、1965
 - ・アビラ・ヒロン『日本王国記』諸本
フランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵文書 AFIO 26-3 (筆者撮影)
エスコリアル本=サン・ロレンソ・デ・エル・エスコリアル図書館所蔵 O-III-19 (デジタル化マイクロフィルム画像)
スペイン国立図書館 (BNE) 本…Mss. 19628 (デジタル化マイクロフィルム画像)
 - ・チンチョン報告書 (1613-1614年署名) …フランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵文書 AFIO 23-1 (筆者撮影)

【文献一覧】

- 池上岑夫 (1984) 『ポルトガル語とガリシア語 ― その成立と展開 ―』、大学書林。
- 川口敦子 (2016) 「フランシスコ会イベロ・オリエンタル文書館所蔵ディエゴ・デ・チンチョン報告書の日本文字とローマ字書き日本語」、『三重大学日本語学文学』27, pp.1-11。
- 川口敦子 (2017) 「アビラ・ヒロン『日本王国記』諸本と日本語の表記 ― チンチョン報告書との比較を通して ―」、『三重大学日本語学文学』28, pp.1-10。
- 寺崎英樹 (2011) 『スペイン語史』、大学書林。
- 土井忠生 (1982) 「アビラ・ヒロン『日本王国記』の日本語」、『吉利支丹論攷』pp.275-297。
- 山田善郎他 (1996) 『スペインの言語』、同朋舎出版。

〔かわぐち あつこ 本学教員〕